

がたつ」次郎「いかないかな、又迷惑をさせうで」
 太郎「身供も手を掛ける、そちらを持って」次郎「心得た」太郎「グワラリ」次郎「チン」太郎「扱お歸りなされば泣いて居よ」次郎「泣けばよいか」
 主人「只今罷り歸る、やいやい戻つたぞ」二人「泣け」主人「心もとないが何事じや」太郎「次郎冠者申し上げい」次郎「わごりよ申し上げさせませい」太郎「お留守を大事と存じて、次郎冠者と相撲を取りまして御座れば、次郎冠者は手取りで御座り、私が小股を取つてこかしますと、こけまいと存じて掛物に取りついたらば、あの様になりました」主人「これはいかな事、あれは身供が秘藏の観音をあの様にしをつた」次郎「かへしさに天目の上に投げられましたあの様に微塵になりました」主人「是はいかな事、おのれを何としたものであらうぞ」

太郎「か様に大事のお道具を書ひまして生けては置かせられまいと存じて、附子を食べて死なうと存じて下されたれどもまだ死にませぬ」主人「おのれ等今の間に滅却せうぞ」太郎「一口食へどもまだ死なす」次郎語「二口食へども死なれもせず」太郎語「三口四口」次郎語「五口六口」二人語「十口あまりになるまで食うたれども死なれぬ生命自出度さよ、なんぼう」主人「やいそこな奴」次郎「はわ」太郎「は何としたものであらう」主人「まだおのれは、夫に居る」二人「免さつしやれとと」主人「やるまいぞとと」(おはり)

金魚物語

雨 峯 生

わたくしは元高田村山吹の里と申す片田舎に生

れまして、そして兩親とも大變に達者でまた親類も澤山あり兄弟も澤山ありました、そう、わたくしの生れましたのは今年の三月、そろそろ暖たかくなり始めた頃で、それはくろくろくお庭の池で、色くろくな草や花や、奇麗に飾られてこんないゝ處はないと思つて居りました、だんくろく大きくなるにつれて、遊ぶのが面白くなつて、きまつたところ、わたくしの住居を持つて居る、主人の人が親と一緒に置く、危険から別に置くかうとか云つてどうゆうわけなのかしりませんが、鹽のやうな、桶を、たしか四斗樽を半分に切つたやうなのを水に浮かして、丁度船見たいな家を造らつてくれて、其中には、藻草を澤山に入れて、食べ物には不自由もないやうにしてくれました、ふとーさんやおかーさんは離れて居りますが、そん

なに淋しくもなく、澤山の兄弟や姉妹で小供同志の金魚世界見た様な風にして居りました、尤もわたくしの兄弟の中にはこの屋形船だか、軍艦だか知れないやうな、こんな處へきてから、生れたのもあるんですが皆な中よく遊んで居つて、喧嘩なんざあしませんでしたまた何もこれと云ふ心配もないのでしたが、たい時々蛙の奴が飛びこんできて水を荒すので困りました荒す度に、仲間のものは大變酷い目に遇ひますので兄弟や姉妹が食ひ殺されました、けれど澤山の家族で毎日毎日遊んで居るので、随分面白かつたのです、ところが或日のと、この家へ泊つたお客があつて何でも朝起きてから御飯前に、庭下駄を穿いて、私共の居るところへきて、見てゐましたが、鹽を彼處へやつたり、此處へやつたりして、偶には藻を引き上げ

たりして居ましたつたが、到頭、茶碗の片を持つてきて五匹と云ふものを上げて、正宗の空瓶に、鹽の水を入れ藻を無理に押込んだりして、流し込んでしまつたのでした大きな家に今迄入つて居つたのに、酷く小ぼけな處へ入れたのだと思つたけれど、それからお客さんの人はどうして呉れるとだかわかりませんから、黙つて、(喋舌つたところ人間には分りやしませんけれど)居ました、ところ、わたしたちはあつちこつちと持つて歩いて、見たともない町だの家の並んで居る處なぞを通つて、ふと瀬戸物屋の前で、何とかかとか其の客へ人が云ふのが、ビードロ饅だからよく見えて、何でもよくは分らないが、植木鉢でもないやうだし、どんぶりでない、眞黒な稗蔴の鉢だとか云ふのを買つて、縄でからげて銅錢を何で

も二つか三つ置いて、瀬戸物屋の見世を出ていつたのです、それからどういつたのだが途中はちつとも知らなかつたところが今度はどう其の客人の家に來たのだと見えて主人は十四五の子供を呼んで、其のビードロの徳利から出して、新らしい、土臭い、先つきの鉢の中へ移したのでした、向ふの石の手水鉢の方を一寸見たら、其處には四五疋の姉さんのやうな、外處の金魚が居たのでした。私なんぞと一緒にしてくれないのでまつたのでした、誰かが外に來てくれる者もないので、モー自分達は貰はれて來たのだから仕方がないと思つたのですけれども、何だか元の池の方が戀しくつてくつて仕方がないんです、それでも知らない處の水を呑ませられたり何かするといけないと思つて居たのでした、元の池で飲むで居た水を入れたり、藻草

も入れてくれたもんだから飲むものや何かは別に心配ではなかつたのです、それで、今度の主人の人も親切にして呉れるものだから、日柄が経つに随つて漸々と自分の家見た様になつたので、五疋のものは皆んなが仲よくしも居たのです、

或時主人が鶏卵の焼いたのを、自分の鉢よりも大きなのを入れて呉れたのでしたが、今まで其んなもの食べたことがないのに、食べて宜いのかどうかかわからないから聞いて見たくつてもお母さんが居ないし、皆んなが小さいものばつかしだし、わからないもんだから、食べるものもあつたり食べられないのもあつたりして居たのですが、まあだ食べられないのは知れきつて居るのに、皆んながきつと食べたのでせうよ、大變に元氣がわるくなつたものもあつたり、何かしましたの、ところが

また主人の處にお友達の人が出て、大變金魚の事をよく知つて居る人だとか何だと云ふて、主人が種々さいて居るやうでしたが、わたし達は遊んで居たから、よく知らなかつたのですが、水を換へるのなら、朝九時前に取り換へればいゝとか何とか云ふて居たやうでしたそのせいなんでせう、翌日は水を半分斗り取り換へて新らしくして呉れたのでたしが、味はいゝのでせうが、矢張り元の水の方が甘いやうな氣がしてならないのでした、これもなれとば直るだらうと思つて居たところ、其の翌晩は雨が大變ふつて、家の鉢の外へ水が澄れ出すやうな始末なので、魂消げるもあつたり、さわぐものもあつたりしたのでしたが、四疋式は漸く底の方へ鉢を貼つくやうにして居たせいでせうが無事でしたが、到頭朝になつたら一疋居ないので

皆なが心配したのでした、主人の人も起きて来て直ぐ見たら、鉢の外へ流れて、臺の處で、苦がつて居つたと云つて直ぐに鉢の中に入れたのでしたが、もう運の盡きと見えまして、其日の晝頃には死んでしまつたのです、兄弟五疋でこんな遠いところへきて、漸く主人の人も馴れなれしくなつたと思ふたら、一疋が不慮の災難で死んでしまひ外のものとは何だか工合がわるいので心細くつて心細くつて堪らないのです、鉢もまだ四分か三分位また水泳ぎもやつと出来る様になつた斗りでこんな目に遇ふのは何たる因果のとだらうと心配して見たものゝ、何としても駄目、また翌日も二疋死んでしまつたのです、何がわるくつて死んだのかかわらず、此間きたお客様でもこういふ時きてくられて何とかしてくれ、ばいゝのに、斯んな時は來

て呉れず、もよく淋しくて、残つた一疋を方ちも柱とも頼んで見たんだけれども、そいつもわたしもモ一近いうちに死ぬかも知れぬ。先つき聞いて居ると、向ふの水鉢の五疋の金魚は、別の人に取ら出されて奇麗なビードロの家に入られて居つたが、昨日とか、雀だか何だかに啄かれて死んでしまつたり野ら猫に攫きさらはれたりして一疋も存命して居ないと云ふから、屹度今年は金魚の厄年なのかとも思ふんざなんと云ふから『そらかなー、金魚なんぞも不時の災難でいものはあるものだなあ、するとまた、其のやつは、一疋別になつたところで、早でも續けば水が干て死ぬし雨がふつて流されて大きい池でも流れこめばいゝ、けれども、また雀やなんかに食はれたり、蛙なんかに攫まつたりすると死んでしもうたから、一層

不運と諦らめて俺ら死ぬよ」ぶちめそう心細いと
 を言はねーでくれよ、氣を強くもつてくれ〜と
 呉れ〜も頼んだのに、この奴も到頭仰向になつ
 て白くなつて、眼玉も飛び出してしまつた、わゝ不
 運なのは自分斗りだ、また梅雨にでも入つたら流
 れ出してしまふのだから、徒ら小供の玩弄物にな
 らないで幸福だと思ひや、自然の災難にかゝるし
 こんな憂き目を見るなら一層生れぬ先きにと思ふ
 た所ろ、それも始まらぬ、生命があるのに自殺な
 んぞは親不孝だし、わゝどうも仕方がない一その
 事も一何もかも運にまかせるとするより外はしか
 たがない、オヤ家の主人の人が何とか云つて居る、
 命あるものは常に命を大切にすべし、大切にす
 とも吝むべきにわらず、死は避くべからずとも
 之に處するの道を誤る事なかれ、心自から安ら

かならん……………

なる程、わかつた、主人もなか〜面白いを云
 つて居るな一併しこの事がわかつたと云ふをど
 うか主人の人間様に知らせてやりたいが、何を云
 ふにも金魚のはかなさ、たゞみづにくらそうぞ、
 いや、みず知らず、言はず、語らず、思はずに暮
 さばいかに樂しかるらんだ、何もかも今日が命で
 御座いますよ、

